躍 いきいき狭山人

一人でも多くの子ども達が 戦争や核のない世の中を目指してくれるように 私はヒロシマを語り継ぐ

広島に原爆が投下されて、今年で69年。その原爆体験の語り部として活動されているのは、市内堀兼にお住まいの中島寿々江さんです。

昭和20年8月6日、午前8時15分、広島に原爆が投下され、当時大手町国民学校の6年生(11歳)だった中島さんは、両親が住む広島市大洲町で被爆しました。ふだんは爆心地にほど近い祖母の家で暮らしていましたが、その日はちょうど夏休み。爆心地から約3・6㎞離れた両親の家にいたため、ガラスの破片が腕に刺さっただけで奇跡的に助かりました。

「その日は、朝から雲一つない真っ青な空でした。空がピカッと光り、ドーンと大きな音とともに家が揺れ、目の前が真っ白になったんですよ」と、中島さんは原爆投下直後の様子をゆっくりと語り始めます。

中島さんが語り部として被爆体験を語るきっかけとなったのは、平成18年に所沢市から依頼された「平和の講演会」での講演。「原爆を落としたアメリカが憎かったし、今でも原爆のせいで『苦しいよ、苦しいよ』と言いながら死んでいった従兄弟たちの声が耳に残っています。焦土と化した広島で、炭のような死体もたくさん見てきました」という中島さんにとって当時の体験を語ることは、涙があふれ感情的になってしまい、自分にはできないと何度も断ったそうです。しかし、熱心に依頼されるうちに、「亡くなっていった人たちは語ることができない、誰かが悔しい思いをして死んでいった人たちのことを伝えなければ」と、体験を語ることを決意しました。この気持ちを胸に、言葉をつないでいこうと。

中島さんはこの講演会を機に、小・中学生に対しても被爆体験を語り継ぐ活動を始めます。毎年、市内や近隣の学校を訪れ、11歳のときに体験したことを子ども達に伝わるよう、同じ目線に立って話しています。「その日は、建物疎開で空いた建物を倒すために、ふだんは遠くで生活している多くの女学生・中学生が広島の中心部に集まっていました。そして、原爆投下。爆心地に自分の子を探しにきた親が、数日後に苦しみながら死んでいくんです。火傷も怪我もしていないのにですよ。それが原爆なんです」と、原爆の恐ろしさに、中島さんの口調も自然と厳しくなります。

また、中島さんは、原爆体験を語り始めて、年々考え方が変わってきたといいます。「自分の悔しい思いや事実だけを伝えるのではなく、これから大人になっていく子ども達の一人でも多くが、戦争のない、核兵器のない世の中を作ろうと考えてくれるように、平和が大切であることを伝えたい」と切に願うようになったそうです。

「私が今こうして生かしていただいているのは、人に戦争のこと、原爆のことを語り継ぐ使命があるのでは…」と語る中島さん。今年もまた、これから未来を担っていく子ども達の心に、平和の種を蒔き続けていきます。

広島被爆の語り部
中島寿々江さん(堀兼)

その悲劇を今に伝える広島の原爆ドーム

6月14日(土)、堀兼中学校で行われた「ふれあい講演会」

講演を聴いた子ども達の感想が、「伝える」力を継続させてくれます

いきいき自治会

堀兼地区自治会連合会

寺院跡地に建てられた母子3体の地蔵。犠牲者の冥福を祈り、震災の記憶を後世に伝えています

堀兼地区の17自治会は、5月21・22日の両日、正副自治会長による視察研修として、宮城県と福島県を訪問しました。東松島市の野蒜地区では、ボランティアの方から震災当時の話を伺い、津波で押し流されてしまった寺の跡地で鎮魂の鐘を鳴らし黙とうを捧げました。震災経験者の貴重な経験談や被災地を自分たちの目で見ることで、改めて日ごろからの災害への備えと地域の繋がりの重要性を考える有意義な研修となりました。

震災の記憶や経験を風化させることなく、今後も地域一丸となって防災意識の向上に努め、安全・安心な地域づくりを目指していきます。

文化財60年のあゆみ ⑤

宮地遺跡

～ほぼ完全な状態で発見された縄文時代の敷石住居跡～

昭和45年12月、笹井字宮地上のゴボウ畑で、当時関東地方では珍しい「敷石遺構」が耕作中に偶然発見されました。翌年2月から行われた発掘調査で、縄文時代中期末(今から約4千年前)の敷石住居跡と分かり、51年には県の重要選定遺跡に選定されました。

56年からは、笹井小学校の建設に伴って約1年間調査が行われ、縄文時代中期と奈良・平安時代の大集落遺跡であることが判明。現在まで7回の調査が実施され、100軒以上の住居跡や多くの土器・石器が出土しています。

●文化財データ
県重要選定遺跡選定日／昭和51年10月1日
所在地／笹井字宮地上

市民リレー 人

私の宝物 …

一緒に嫁いだ煎茶器一式

大野みずほさん
(青柳在住)

私の宝物は、嫁入り道具の一つとして持ってきた、備前焼緋襷(ひだすき)の煎茶器です。

岡山の実家では、日ごろから煎茶器を使っていましたが、嫁いできた狭山では急須(きゅうす)でお茶を淹(い)れることが普通で、あまり煎茶器を使いません。そのため、ふだんは大切にしまったまま。ふと思い出して使うことはあっても、実家にいたときのように日常で使うという訳にはいきませんでした。

それでも、たまにこれでお茶を淹れると、また違ったまろやかな甘みのお茶になります。この褐色の地にうっすらと浮かび上がる模様も、私の手の中にすっぽりと納まる小さな湯飲みも、長く使っていけるよう、選んでくれた両親の思いが詰まっています。

これからは、夫と二人で、この煎茶器でお茶を楽しむ時間をもっと増やしていきたいと思います。

使うと風合いが増します

次回は、広瀬にお住まいの方を紹介します。

ハロー 仲間たち Vol.395

環(わ)の会

「お茶」と「雑木林」は、入曽地区の貴重な財産。この地域の特色を生かした事業を展開しようと、10年前に会を結成しました。

毎年2月に地域の子ども達と協力して雑木林で落ち葉を掃き、その落ち葉が腐葉土となった夏には「かぶと虫観察会」を行っています。土を掘ると出てくるかぶと虫を見つけたときの子ども達の歓声。里山を楽しむ元気な声を聞くと私たちの活動にも自然と熱が入ります。

今年は、会のメーンイベントである「いりその里のお茶まつり」(10月12日)を、入間小学校跡地で開催する予定です。狭山茶の試飲や模擬店、体験などもありますので、ぜひお越しください。

問合せ中内丈夫さんへ☎2957-7334